

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.071; あとがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/2014

あとがき

小長谷有紀

人類にとって20世紀は飛躍的に人口が爆発し、環境問題への認識を産んだ時代であった。モンゴル高原においても同様であり、モンゴル国の場合なら、人口は約4倍、家畜は約3倍に増加した。遊牧社会の劇的な転換であったと言えよう。こうした変化は、政治的には「社会主義の選択とその放棄」というかたちをとっていた。この人類史の大きなうねりのなかを人びとは実際にどのように暮らしてきたのであろうか？

「モンゴルにとって20世紀とは何であったか」という問いを掲げ、ただし空間をモンゴル人民共和国（現在のモンゴル国）に限定し、時間を1920年代以降に限定して、人びとから昔の話を聞くという仕事を続けてきた。社会主義的近代化に焦点をあてて「語り」によるモンゴル現代史を再構成するという試みである。

一般に「近代化」に関する定義はアプローチによってさまざまありうるが、実態的な社会変化に限れば、産業化、都市化、社会サービス化などに大きくまとめることができよう。モンゴル国の場合、産業化とは、生活様式としての遊牧の畜産業化と、その畜産物を加工する工業化と、また新しい部門としての農業化である。こうした産業面での発展については、すでにインタビュー集を上梓した。

都市化についてはとくに建築学の方面から別途インタビューが行われており、その1部は『東京大学生産研究所報』57-3号（2005）（松嶋愛，村松伸，アディヤスレン・ルハグワー，「ウランバートルを建物のずっと続く大きな都市にしたい！—20世紀ウランバートル建設の歴史(1)—A.ヒシグト氏インタビュー」および「ヨーロッパ式モンゴル—20世紀ウランバートル建設の歴史(2)—G.ロヴサンドルジ氏インタビュー」，pp.18-43およびpp.44-58）に掲載されている。

社会サービス化とは具体的には、かつてチベット仏教が担っていた教育、医療、福祉について新たな社会制度として提供されるようになった過程を指す。また、こうした過程によって、エリート知識人ばかりでなく、大量の知識人層として「国民」あるいは「市民」が創出された。こうした社会サービス化あるいは知識人の創出についてもおおかたのインタビューを終えたのでいずれ刊行したい。

本書は、そうした実態的な社会変化を率いてきた政治家たちの「闘争」に焦点をあてたインタビュー集である。本書の成立までには多くの方がたのご協力を得た。カウンターパートであるI.ルハグワスレン氏（モンゴル文化基金事務局長）には、インタビューの人選から監修まで並々ならぬご尽力を賜った。また原稿作成に際しては、外国人客員教員として国立民族学博物館に滞在されていたS.バヤラー氏にご協力いただいた。

邦訳については、Ts. ローホーズ氏とS. ジャランアージャブ氏を三矢緑さん（東京外

国語大学大学院生)に分担していただいた。本文中の〔 〕は彼女が邦訳時に付してくださった注である。D.ソドノム氏を加藤紀子さん、そのほかを加藤真紀子さんたちに分担していただいた。こうしたすべての翻訳原稿に対してさらに三矢緑さんおよび前川愛さん(当時、総合研究大学院大学に在籍)から多くのご教示をいただいた。特に記して感謝する。また、形式的に統一する際には田中美恵子さんの手を大いにわずらわせた。ただし、本書における訳語統一など内容に関する責任は一切、編者として私が負うものである。たとえば、日本語で牧民と言えば人びとを管理することを意味したが、本書では社会主義時代の造語を最も直截的に表現する言葉として使用しており、そうした選択は編集の判断による。公式文書類とのつきあわせはもちろんこれからひも解かれる領域として残されており、本書が1つの資料となって、モンゴル現代史に関する研究が進捗することを切に望む。

なお、本文における見出しは、長い原稿を読みやすくするために邦訳後に付したものである。同様に、モンゴル語テキストにおいても、対応する箇所それぞれ見出しを付けておいたけれども、モンゴル語読者のために文学的に付されており、日本語の直訳ではないことをお許しいただきたい。

インタビューに応じてくださった方がたをはじめ、本書の作成にいたるまでのさまざまな場面で協力し、支えてくださったすべての方がたに、改めて厚くお礼申し上げます。